第９課　汚れから清めへ

【暗唱聖句】

彼は続けた。「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る」ダニエル8：14

【日曜日・雄羊と雄山羊】

8章はダニエル書の中心的な章で、これまれの各章が聖所の荒廃という形で象徴的にまとめられ、それがいったいどうなるのかという問いかけに対する解き明かしが、これ以降の章に続いていきます。またダニエル書全体の鍵となる節（8:14）「2300の夕と朝」が出てくるのもこの8章です。8章の始まりは、ベルシャツァル王の治世第三年にダニエルが再び幻を見るところから始まります。幻の中で、雄羊と雄山羊が出てきますが、どちらも聖所の奉仕のいけにえとして、しかもどちらも一緒に捧げられるのは1年に1度の贖罪日であることから、この幻は単に歴史的な国の興亡だけでなく、聖所における贖罪の業をも連想させます。

雄羊は7章の熊に該当し、それはメディアとペルシャである（20節）と説明されています。それが「西、北、南に向かって突進」する様子は、7章の3本の骨を熊が加えた幻にあたり、すなわちバビロン・リディア・エジプトを制圧したことを現わします。雄山羊は7章の豹に該当し、それがギリシャである（21節）と説明されています。「力の極みで角は折れ」（8節）ますが、これがアレクサンダーが33歳で急死したことを現わします。そして、「四本の際立った角」（8節）である4人の将軍が分割統治します。興味深いのは、ダニエルがこの幻を見た時点では、まだバビロニア帝国の時代であり、ペルシャやギリシャは未来が台頭するのは未来の出来事であったということです。

【月曜日・小さな角が生え出る】

「そのうちの一本からもう一本の小さな角が生え出て、非常に強大になり、南へ、東へ、更にあの「麗しの地」へと力を伸ばした」（ダニエル8:9）

小さな角が登場しますが、「そのうちの1本から」生え出ると書かれてあります。「1本」となっていますが、原文では「1つ」です。では、「そのうち」とは何を指すのでしょうか。前節を見ると、「四本の際立った角」と「天の四方」の2つの言葉が書かれてあり、そのどちらかであることがわかります。ただ原文では「角」という言葉はなく、「天の四方」は原文では「天の4つの風」となります。口語訳では「その角の1つから」と訳していますが、これは誤訳です。ヘブル語の名詞は男性名詞と女性名詞に分けることができるのですが、「そのうち」という言葉は男性名詞で、「角」は女性名詞、「風」は男性・女性どちらもとれる名詞です。したがって、男性名詞である「そのうち」が女性名詞である「角」を指すとは考えにくく、しかも「角」という言葉が元々ないとすれば、「そのうち」は、「角（4人の将軍）」ではなく、「天の四方（東西南北）」を指すことがわかります。つまり、ある方角から小さな角が起こり、最初は小さかったのですがだんだん大きくなり、「麗しの地」であるパレスチナに進出してくるということです。つまり、「ローマ」を指していることがわかります。また、この場合のローマは、最初は「南へ、東へ、更にあの「麗しの地」へと」と、水平方向の動き（軍事力）をし、次に「天の万軍に及ぶまで力を伸ばし、その万軍、つまり星のうちの幾つかを地に投げ落とし、踏みにじった」（ダニエル8:10）と、垂直方向の動き（聖書の誤った教え）をします。このことから小さな角であるローマとは、最初は帝国ローマでありクリスチャンに対する迫害を警告し、次に教皇制ローマとして聖書に忠実な残りの民に対する攻撃を警告しているのです。

7章及び8章に登場する小さな角には共通点があります。それは初めは小さかったがだんだん大きくなること。迫害する勢力であること。うぬぼれが強く、冒涜的であること。神の民を標的にすること。活動期間が預言されていますが終わりの時まで勢力は拡張し、最後は超自然的破滅に直面すること。

【火曜日・聖所への攻撃】

「これは天の万軍に及ぶまで力を伸ばし、その万軍、つまり星のうちの幾つかを地に投げ落とし、踏みにじった」ダニエル8:10

ここでの万軍や星は、地上の聖徒たちを現わしています。つまり小さな角は、聖徒たちを迫害し苦しめるということです。また、「天の万軍の長にまで力を伸ばし」（8:11）とあります。天の万軍の長とはイエス・キリストを指しますので、イエス・キリストに対して敵対しローマ政権下でキリストが十字架で処刑されたことや、皇帝礼拝、ローマ法王権のたかぶりなどを指しています。さらに「日ごとの供え物を廃し、その聖所を倒した」と続きます。これはローマ帝国によって紀元70年に神殿が破壊されたことから始まり、やがてカトリック教会が法王をキリストの代わりに頭とし、キリストを信じる信仰によってではなく教会が定めた業による義を、またキリストによるとりなしではなく、司祭や聖母・聖人たちによるとりなしに変えてしまいました。この点が特に、日ごとの供え物を廃したという部分の成就となります。これにより象徴的に聖所の働きの基がくつがえされてしまったのです。そして「真理を地になげうち、思うままにふるまった」（8:12）のです。

【水曜日・聖所の清め】

「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る」ダニエル8:14

聖所が踏みにじられる状態は、「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る」と宣言されています。これは何を意味しているのでしょうか。地上にはもはや聖所はありません。そもそも聖所は、天において本物があり、地上の聖所はそれをまねたものに過ぎませんでした。しかし、地上の聖所で1年ごとに繰り返し行われてきたことは、天の聖所で行われるであろうことを予表するものでした。だから、聖所があるべき状態に戻るとは、地上の聖所で行われてきた象徴的な行為が、天の聖所において本当のこととして起こるということなのだとわかります。地上の聖所の働きの大きな目的は、民の罪を除去し救いの道を開くことにありました。その方法は、民たちは燔祭を捧げることで罪が聖所に移されていき、1年に1回大祭司が至聖所に入って、そのすべての罪を除去して清めるのです。これと同じことが、2300の夕と朝の後、天の聖所においても行われるというわけです。

また口語訳聖書では「清めらて正しい状態に復する」と訳されていますが、「清める」と訳されたニツダクという言葉は、「義と宣言される、正しさが証明される、疑いが晴れる」という意味があります。審理し、無罪とし、救済するという、裁きと救いの過程が現わされた言葉です。つまり聖所があるべき状態に回復するとは、キリストの贖いにより神様を信じてきた民の正しさが証明され、それによって神様のみ名が再びあがめられるということです。

【木曜日・預言の予定表】

ダニエルは、一人の聖なる者（天使）が、「この幻、すなわち、日ごとの供え物が廃され、罪が荒廃をもたらし、聖所と万軍とが踏みにじられるというこの幻の出来事は、いつまで続くのか。」ともう一人の天使に問いかけるのを聞きます。「いつまで」という問いは、わたしたち多くのクリスチャンの叫びでもあります。罪の世がいつまで続くのか、悩み苦しみがいつまで続くのか、これは天使の叫びでもあったのです。すると、「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る」と語られます。夕となり朝となるという表現は1日を現わす表現ですので、2300回の夕と朝とは2300日となります。預言解釈では1日は1年となるので、2300年後に「聖所はあるべき状態に戻る」ことがわかります。では、いつから数えて2300年後なのでしょうか。これが語られた瞬間からでしょうか。別の起算点があるのでしょうか。これについては、9章に続きます。